

学位論文題名

マルクーゼ社会理論における方法論

～現代メディア研究の方法論構築に向けて～

学位論文内容の要旨

研究概要と目的

マスメディアを含むメディア研究は、多くの先人たちの努力にもかかわらず、いまだ一つの独立した学問とはなっていないように見える。メディアに関わることすべてがメディア研究の対象だとすることは、メディア研究の現状を著しく多彩で活発なものとする反面、あえて言えば、著しく雑多で混乱したものになっている。もしメディア研究が現代社会を読み解くための新しい「科学」となるべきだと信じるのであれば、先ず必要なものは「方法論の確立」であり、本研究はその意味での「メディア研究の方法論確立の試み」である。方法論とは「個別的・具体的事象の分析を行う前に、考えておかなければならない一般的なこと」で、メディア研究でいうならば、現代社会構造におけるメディアの「位置」と「機能」である。そのためには、「現代社会とはいかなる構造の社会か」が同時に問われなければならないわけで、本研究がヘルベルト・マルクーゼ（1898-1979）の現代社会論を分析の対象として選んだのもその理由からである。マルクーゼ自身、現代社会を認識するにあたって、自身の方法論を構築することから始めている。本研究はまず第一に、そのプロセスを跡づけることに努めた。マルクーゼの方法論を確認しようという試みは先例がないので、本研究はその点でマルクーゼ研究にささやかな蓄積を行うことを目指す。しかも、マルクーゼはその後期においてメディアへの言及をかなり詳細に行うので、本研究においても、「マルクーゼのメディア論」を検討する。そして最後に、現代メディアの本質を認識するための「方法論」として有効な視点がないかどうか検討する。

研究方法、研究対象及び手法の妥当性

マルクーゼの主要著作『理性と革命』『エロスと文明』『一次元的人間』を主たる研究対象として、「方法論」の視点から、テキストを丹念に分析・比較・対照する方法をとった。マルクーゼ理論の柱となる「一次元性」概念の構造を検証するために、マルクーゼによるヘーゲル・マルクス・フロイト読解の内容およびマルクーゼが彼らから学んだものを跡づけた。マルクーゼは、ヘーゲルが近代市民社会をどう捉えたかを主として「精神現象学」と「大論理学」の詳細な分析から明らかにし、そうすることによって自身の「方法論」を構築した。ならば、マルクーゼの方法論構築の過程を綿密にたどることによって、私は自身の「方法論」探求の第一歩を踏み出すことができると考えて、本研究でそれを行った。「ヘーゲル以後、哲学は社会理論となった」と言われる。近代以後、私たちは「人間とは何か」「メディアとは何か」を問う前に、「社会とは何か」と問わなければならない時代に生きている。現代の思想家にあって、きわめてこの問題に敏感であったマルクーゼを研究の対象とし、その「方法論」構築の過程をあとづけたのはそのためである。

序 章

本章では、現代メディア研究の現状と課題、「方法論」確立の必要性を叙述し、マルクー

ぜの社会理論における「方法論」探求の過程をたどることについて述べる。メディア研究が「学問として成立する」ことを阻んでいる要因のひとつに、メディアの「社会における位置」が定まらないことがあるが、マルクーゼはその「位置」についてある断定を行うこと、しかし、彼の「方法論」の理解なしでは、彼の意図を理解できないことを述べる。

第1章 マルクーゼの「市民社会」概念～『理性と革命』

この書は難解なものとして知られているが、その理由は、この書がマルクーゼの「方法論」確立の書であり、その視点からヘーゲルとマルクスの近代社会認識の「方法論」を探究したものだからである。マルクーゼによるヘーゲル・マルクス社会認識の方法論は次の7点にまとめられる。1) 社会認識の基本は「概念的把握」である、2) 「概念」は事象の本質であり真理である、3) 概念的把握は「弁証法」による、4) もし概念的把握をしないならば、私たちは「常識」に囚われるしかない、5) 市民社会の本質は「理性」であること、6) 市民社会は歴史的存在であり、ゆえに、市民社会の概念にも「歴史的 성격」がある、7) 市民社会は個的なものが特殊な利害関心に基ついて闘争を繰り広げている社会であるが、「特殊者」は「一般者」を想定するもので、「一般者」こそ現実の真の形式（真理）である。

第2章 近代社会と抑圧～『エロスと文明』

前章の発展として、「理性」の「歴史的 성격」が本章で論じる『エロスと文明』の主題となる。ここではフロイトの方法論が詳述されている。ヘーゲルが「近代社会」の認識を目的としたのに対して、フロイトは「社会」そのものの認識を目的とした。言い換えれば、ヘーゲルが「前」近代社会と近代社会の差異を考察したのに対して、フロイトは「前」社会と社会（＝文明）を対比したと言える。そこから、マルクーゼは「抑圧」「余剰抑圧」という重要な「方法論」を抽出する。マルクーゼにとって、フロイトの方法論は、ヘーゲル・マルクスの「近代社会認識」を「現代社会認識」に転換する重要な構成要素となる。

第3章 現代社会認識の方法論～『一次元的人間』

『一次元的人間』においてマルクーゼは、獲得した方法論を用いて眼前の社会を視て、それがどのようにみえるかを考察しようとしている。マルクーゼの方法論によって映し出された現代社会の像は、「特殊者」「一般者」の二重構造からなる近代社会とは異なって、フロイトの「意識・無意識」構造に似た本質的に不特定なものとして見えた。しかも、フロイトにあって無意識が「方向性をもたないエネルギー」（＝本能）の貯蔵所とされたのと同様に、現代社会の現象の奥に「方向性をもたないエネルギーの貯蔵所」があり、そこにテクノロジーとメディアがあるとされた。こうして、マルクーゼは、「現代社会におけるメディアの位置」を特定することができた。同時に、フロイトにあって社会的規範の内面化の機能を担うとされた「超自我」が、現代社会では不在である（すなわち外在する）ことが論証される。彼の概念「一次元性」「テクノロジーな合理性」の意味も、このような「方法論の視点」の下で初めて正確に把握できるものであることを示す。

終章 メディア研究の方法論構築に向けて

現代社会を近代社会から区別するものは、テクノロジーとメディアであるが、それらが現代社会のどこに位置するかを方法論的に明確化したのはマルクーゼの大きな功績であろう。元来方向性がないテクノロジーとメディアを現行の方向に振り向けた行為があったと思われる、それはひとつの「歴史的投企」だったというのが、『一次元的人間』でマルクーゼが主張したことである。歴史のある時点で誰かがある「最初の選択」をしたということ——それが「投企」であるが、すると歴史はあたかも絶対的必然であるかのように進行していくようにみえる。だから、逆に、「新しい投企」は不可能ではないことになる。その「基準」としてマルクーゼは、「既成の全体性」を正確に定義することが「新しい投企」の端緒となる、と述べている。もし、例えば、マルクーゼが一次元的社会を克明に描いたことがそれにあたるのであれば、私たちがマルクーゼの方法論を学ぶ意味とともに、マスメディアが「現代社会の批判的理論」においてある役割を担う可能性もみえてくるように思う。すなわち、既成

の現代社会の「構造そのもの、基本的諸傾向、諸関係」の克明な描写を行うこと、である。これはマスメディア、またはその一部であるところのジャーナリズムにとって可能な役割ではないか。その検証は実証研究として行うことができるだろう。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 山 田 吉 二 郎
副 査 教 授 杉 浦 秀 一
副 査 教 授 江 口 豊

学位論文題名

マルクーゼ社会理論における方法論

～現代メディア研究の方法論構築に向けて～

本論文の特徴は、現代メディアに関する実証研究ではなく、現代メディア研究が「一つの独立した科学」であり得るための「方法論」を探究した点にある。方法論とは「個別的・具体的事象の分析を行う前に、考えておかなければならない一般的なこと」であり、重要であるとともに、地味な理論的研究である。既存のメディア研究は、実証的分野では豊富な蓄積があるが、方法論分野はほとんど未開拓であり、どのようにその研究を進めるべきか、困惑するところだが、著者は「現代社会におけるメディアの位置」を定めることによってこの難問を突破できると考えて、現代社会理論の研究から始めた。その過程で、マルクーゼの現代社会論が将来の「現代メディア研究」の方法論に関して示唆するものが多々あることを見て、マルクーゼの「方法論」の考察を行った。著者のこの研究プロセスは理論研究のあり方として正当なものとして評価できる。また、マルクーゼを研究対象として選択したことは適切であったと評価できる。

著者はマルクーゼの代表作「理性と革命」「エロスと文明」「一次元的人間」の3作に絞って分析している。著者の目的が「マルクーゼの方法論」探究であって、マルクーゼの全体像ではない以上、この絞りこみは正当なものとして評価できる。難解なものとして知られる「理性と革命」をマルクーゼによる「近代社会認識の方法論確立」の試みとして読み解いたことは、本研究の一つの成果として評価する。この読解によって、マルクーゼにおける「近代社会と現代社会の対比」（民主主義・自由主義を理念とする近代社会がなぜ全体主義を経験しなければならなかったか）の意図を発見できたことは注目に値する。ヘーゲルにおける「理性」と「特殊者と一般者」の概念、マルクスにおける「近代社会の歴史性」の認識は、マルクーゼの現代社会認識の方法論として不可欠のものであること、すなわち、現代社会における「一般者の不在」というマルクーゼの視点が、彼の方法論探究を跡づけることでようやく鮮明に浮かび上がってくるわけで、この部分の著者の分析は高く評価できる。

「エロスと文明」においては、「近代社会の中心原理」とヘーゲルが呼ぶ「理性」が「抑圧」の担い手とされる。そこにマルクーゼは、近代社会が全体主義を通過して変容した「現代」社会を読み解く端緒を得ようとしている。フロイトの「欲動」理論（本能のエネルギーには方向性がないこと）と「超自我」（社会的規範の内面化されたもの、欲動の抑圧に大きな役割を果たす）が、現代社会認識の方法論としてマルクーゼが重視するものである。これは、マルクーゼがヘーゲル・マルクスの影響から脱してフロイト主義に変容したとも解釈できるが、方法論の視点からは、マルクーゼは、ヘーゲル・マルクスの方法論（とりわけ「特殊者と一般者」）に則って現代社会を考察しようとして「一般者」が消失していることに気づき、その解釈としてフロイトの理論（「一般者」は「超自我」による社会的規範の内面化に関係すること、「一般者」が失われると、抑圧機能が弱体化して、方向性なきエネルギーが

蓄積されること)を適用してみた、と解釈できる。ゆえに、著者の主張するように、マルクーゼはヘーゲル・マルクスの近代社会認識の方法論にフロイトの方法論を加えたのであって、前者から後者に移行したのではないとする解釈は正しいものと評価できる。

「一次元的人間」でマルクーゼが試みたことは、こうして獲得された方法論を駆使して現代社会を記述することであった、とされる。「次元性」という有名な概念も、方法論的視点からは、「特殊者と一般者」という、本来二重構造であるべき社会の変容を記述するものとして新しい解釈が可能になる。一次元的社会に蓄積される「方向性なきエネルギー」としてテクノロジーとメディアが想定されていることは、この両者が現代社会を近代社会と明確に区別するものであるというマルクーゼの主張として解釈できるとする著者の主張は説得力がある。

本研究における著者の目的である「マルクーゼ社会理論における方法論」の探究は綿密な読解にもとづいて確実な成果を挙げたものと評価できる。副題にある「現代メディア研究の方法論構築に向けて」は、最終的に確認された「方向性なきエネルギー」としてのメディアをどう導くかということになるのであろうか。それは新たな「抑圧」とならないか。マルクーゼの期待する「現代社会の構造そのもの、基本的諸傾向、諸関係の克明な描写」はきわめて示唆的であるが、それは「いかなる視点から？」という「方法論的問い」が投げかけられよう。ともあれ、本研究は、将来の実証的研究に有力な視点を提供する方法論構築の試みとして、着実な一歩を踏み出したものとして高く評価する。

よって著者は、北海道大学博士(国際広報メディア)の学位を授与される資格があるものと認める。